

原著

ピンクリボンプロジェクトの効果

～乳がん検診受診者数の増加を目指して～

徳田暁子¹⁾ * 石川利一¹⁾ 瀬川英之¹⁾ 鍋谷久美子¹⁾ 工藤和彦¹⁾ 木村公子¹⁾辻郁子¹⁾ 品木貴子¹⁾ 佐藤めぐみ¹⁾ 徳理恵¹⁾ 外崎美佳子¹⁾ 品木愛美¹⁾高橋里佳¹⁾ 大熊真波¹⁾ 井田周作¹⁾

要旨：乳がんは日本人女性の11人に1人が罹患する時代になった。乳がんの罹患者は30代後半から増え始め、40歳代後半から50歳代でピークを迎えるとともに、30歳から64歳の死因の1位になっている。乳がんは早期発見、早期治療が大切であり、乳がん検診や自己触診が有効な手段とされている。乳がん受診率が低いむつ市において、乳がん受診者数増加のために重点的な取り組みが必要と考え、プロジェクトチームによる啓発活動を行った結果、増加につながった。

キーワード：乳がん 検診受診 啓発活動 プロジェクトチーム

ORIGINAL ARTICLES

Effect of Pink Ribbon Project

～ Aiming at Increasing the Number of Breast Cancer Examination Patients ～

Akiko TOKUTA¹⁾, Toshikazu ISIKAWA¹⁾, Hideyuki SEGAWA¹⁾, Kumiko NABEYA¹⁾,
Kazuhiko KUDOU¹⁾, Kimiko KIMURA¹⁾, Ikuko TSUJI¹⁾, Takako SHINAKI¹⁾,
Megumi SATOU¹⁾, Rie TOKU¹⁾, Mikako TONOSAKI¹⁾, Manami SHINAKI¹⁾,
Rika TAKAHASHI¹⁾, Manami OOKUMA¹⁾, Shusaku IDA¹⁾

Abstract: It has become the era when one in 11 eleven Japanese women suffer from breast cancer. People suffering from breast cancer begin to increase from the late 30s, peak in the late 40s to 50s of theirs, and are the leading cause of death among 30 to 64 years old. Early detection and early treatment of breast cancer are important, so breast cancer screening and self-palpation are regarded effective means. In Mutsu City with a low rate of visiting breast cancer examination, we thought that focused efforts were necessary to increase the number of breast cancer examinees, and as a result of the project team's enlightenment activities, the rate apparently increased.

Key words: Breast cancer, Medical examination visit, Enlightenment activities, Project team

¹⁾ Muchuri pink ribbon project team (Mutsu-City)

*Corresponding Author: A.Tokuta

(tokuta_akiko@city.mutsu.lg.jp)

1-8-1Chuou, Mutsu, 035-8686, Japan

Received for publication, April 24, 2018

Accepted for publication, June 28, 2018

¹⁾ムチュリー・ピンクリボンプロジェクトチーム (むつ市役所)

責任著者：徳田暁子

(tokuta_akiko@city.mutsu.lg.jp)

〒035-8686 青森県むつ市中央一丁目8番1号

TEL:0175-22-1111 FAX:0175-22-5044

平成30年4月24日受付

平成30年6月28日受理

はじめに

国立がん研究センターがん情報サービスがん登録・統計¹⁾によると、日本人女性の 11 人に 1 人が乳がん罹患する時代となった。乳がんの罹患率は 30 歳代後半から増え始め、40 歳代後半から 50 歳代でピークを迎えるとともに、30 歳から 64 歳女性の死因の 1 位になっている。乳がんは早期発見、早期治療が大切であり、乳がん検診や自己触診が有効な手段とされている。しかし、平成 26 年度の乳がんの検診受診率は、青森県平均が 27.3%、国平均が 26.1%である中、むつ市は 20.2%²⁾と低迷している。「むつ市総合経営計画」において検診受診率を向上させ、疾病の早期発見へとつなげ、将来的にがんによる死亡者の減少を目標にしていることから、受診者数増加のためには重点的な取り組みが必要と考え、平成 29 年度ピンクリボンプロジェクトチームを立ち上げ、啓発活動を行ったが、その効果について検証する。

目的と方法

1. 目的

乳がん検診において、重点的に啓発活動を行うことは、検診受診者数の増加につながるかを検証する。なお、乳がん検診受診率の対象者、検査方法や算定方法は、平成 28 年度以降変更となり、上記の平成 26 年度の乳がん検診受診率と単純に比較ができないため、受診率ではなく受診者数で示す。表 1 は平成 26 年度から平成 28 年度の 40 歳～69 歳の受診者数である。

表 1 過去 3 年間の乳がん検診受診者数

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
40～49 歳	365	340	402
50～59 歳	340	297	308
60～69 歳	486	543	546
合計	1,191	1,180	1,256

*40～59 歳は、視触診のみの受診者も含む

2. 期間及び実施方法

平成 29 年 6 月から平成 30 年 3 月の期間、乳がん検診受診者数増加のためのプロジェクトチームを結成し、啓発活動を行う。

実際

1. むつ市の乳がん検診の現状とこれまでの取り組み

むつ市の乳がん検診受診者は、40～59 歳のまさに死亡原因 1 位の世代の検診受診者数が少ない。乳がん検診を受診しない理由として、簡易的な聞

き取り調査であるが、「検診の日時が合わない」、「面倒である」、「検査が怖い」、「自分は大丈夫である」等があげられた。また、むつ市内に、健診センターや市と契約を締結して個別検診が受診できる医療機関がなく、個別検診を受けるためには、車で 2 時間程度離れた市外の健診センターを利用することになり、ほとんどの方は検診車による集団検診を受診している。これらのことから、乳がんに関する正しい知識が不足していること、乳がん検診の日時が限定されることが乳がん検診受診者数低迷の一因と考えられた。

むつ市の乳がん検診受診者数増加のためのこれまでの取り組みとして、40 歳の無料がん検診の実施及び対象者に郵送による個別検診受診勧奨の実施、検診の実施日や予約方法が記載されている「健康づくりカレンダー」の毎戸配布、むつ市ホームページや市内 FM 放送での検診案内、保健協力員によるがん検診受診勧奨や、市内各地区で行われる健康教室でがん検診の周知を実施していた。

2. ムチュリー・ピンクリボンプロジェクト発足

低迷する乳がん検診受診者数を増加させるために、インパクトのある啓発活動が必要と考え、ピンクリボン運動を実施することにした。そのために、むつ市保健福祉部内の女性職員を中心に、平成 29 年 5 月に女性 11 名とオブザーバーの男性 4 名の計 15 名でプロジェクトを結成した。

ピンクリボン運動は、乳がんの早期発見や検診の重要性を訴え、早期の診断や治療を推進するための世界規模の啓発活動である。自治体が主催でピンクリボン運動を行うケースは少なく、多くは企業や任意団体が行っている。

平成 29 年 6 月 8 日の第 1 回プロジェクト会議では、プロジェクトの目的が、①乳がん検診の受診者数増加、②早期発見や検診の重要性の啓発、③早期の診療及び治療の推進、④最終的には乳がんによる死亡者数の減少であることをメンバーで共有し、どのような活動を行うか話し合った。まずは、むつ市のキャラクターである「マダム・ムチュリー」がピンクのリボンをもったシンボルマーク（図 1）を作成し、プロジェクト名を「ムチュリー・ピンクリボンプロジェクト」とした。



図1 ムチュリー・ピンクリボンプロジェクト
シンボルマーク

3. 目標値の設定

長期的には、検診受診率を県平均に近づけることを目標に、平成29年度の目標は、乳がん検診受診率算定対象年齢である40歳～69歳のマンモグラフィ検査の前年度の受診者数1,242人から200名増の1,442人と設定した。

4. プロジェクトの活動

その後のプロジェクト会議では、どのような企画を行うと、市民にとって効果的な検診受診の動機づけができるかという視点で話し合われた。プロジェクトを行う意味は何か、何が乳がん検診の妨げになっているのか、どうしたら受診につながるのか、そしてそのために自分たちに何ができるのか意見交換を行った。むつ市民が乳がん検診を受診しない要因（以下要因）として、①乳がん検診受診の機会の選択肢が少ないこと、②乳がんの知識不足、③乳がん検診未受診者は検査そのものに不安や恥ずかしさを感じていること、が挙げられた。短期間で効果的に事業を展開するために、チームを検診、啓発、連携そして統括の4グループに分け、図2のとおり活動計画を作成した。そして月1～2回のプロジェクト会議で進捗状況を確認し共有した。10月のピンクリボン月間に啓発のためのイベントを実施する方向で計画を立案した。

区分	実施事項	概要
検診グループ	検診の増設	・4回増設：1月11日(夜間)、1月19日、1月26日、2月1日 * 全回託児サービス付き ・10月再勧奨を行い、目標の1,442人を目指す
	プチ講座	・事業所やPTAなどに保健師が出向き乳がんセルフチェック指導
啓発グループ	光でつなぐピンクリボン(イベント)	・10月2日(月)18時00分から19時00分(受付17:00) むつ市役所本庁舎のピンクライトアップ(協力: 明成建販) LEDキャンドルを使用したピンクリボン むつ総合病院外科副部長 山田恭吾医師による特別講演「今がその時！乳がん検診」 ミニコンサート(尺八・三味線・唄) 健康チェックーズ、啓発グッズ配付 (協力: むつ郵便局 東京海上日動)
	市職員のピンク色アイテム着用	・10月2日(月) ピンクのポロシャツ、ワイシャツ、ネクタイ、ポケットチーフなど着用を協力依頼
	「広報むつ」10月号の特集	・乳がんについて、検診の大切さ、検診車の内部紹介、医師のインタビュー 乳がん経験者のインタビューなど
	ポスター、チラシ、缶バッジの作成と配付	・ポスター70枚、チラシ6000枚、缶バッジ750コの配付 (缶バッジは光でつなぐピンクリボン ウォーキング プチ講座参加者へ配付)
	啓発スライド	・大湊新町三叉路スクリーンとむつ総合病院デジタルサイネージで啓発スライドを投影
	啓発活動	・10月1日 がん患者支え合いフォーラム (展示ブース) ・10月9日健康ウォーキング大会 (ピンク色着用) ・10月14・15日産業まつり (展示ブース) ・10月21日 いい歯の日の事業 (展示ブース) ・11月11・12日地産地消 (展示ブース)
広報グループ	事業所へのPR協力依頼	・郵便局、銀行、保険会社、すこやか及び認知症サポート事業所等へPRの依頼 (ピンク色着用依頼、リーフレット、自己触診啓発ティッシュ配付)
	むつ市ホームページ	・ピンクリボンホームページ開設(むつ市ホームページ内) ・10月中むつ市ホームページ画面の一部がピンク色
統括グループ	プロジェクト会議の開催	6月8日1回目開催から3月14日までに10回開催
	調整	各グループの進捗状況の確認や情報の集約と共有
	デザイン	シンボルマーク、ピンクのポロシャツ、缶バッジ等のデザイン

図2 ムチュリー・ピンクリボンプロジェクト活動計画

検診グループは、乳がん検診の機会の選択枝が少ないという要因①を解決するため、乳がん検診と合わせて子宮頸がん検診を当初予定の12月までの集団検診26回から、平成30年1月から2月にかけて、仕事のある方へ配慮した夕方からの検診の設定や、子育て世代に配慮した託児付きなど計4回増設した。

要因②の対策として、乳がんセルフチェックプチ講座（以下プチ講座）は、健康づくりに積極的

に取り組んでいる事業所であるとむつ市が認定している、すこやかサポート事業所を中心に、約50事業所にお知らせし、プチ講座を希望した事業所に保健師が出向き、クイズ方式の乳がんの正しい知識の習得と乳がんのセルフチェックの方法を学ぶ30分程度の講座を開催した（図3）。11事業所147名が受講し、正しい乳がんの知識や自己触診の大切さが理解できたと好評であった。



図3 乳がんのプチ講座

また、ピンクリボンプロジェクトの事業と平行し、20～69歳の市民の方に、乳がん、子宮頸がん、胃がん、大腸がん及び肺がんの受診勧奨の案内（A4サイズ、カラーで6面の圧着タイプ）の個別の送付と40～69歳の女性に乳がん検診受診勧奨（カラーの圧着ハガキタイプ）の再通知も実施した。

啓発グループは、ポスター、チラシの作成と配付や啓発のためのスライドを作成し、街頭のスクリーンで投影を行った。また、むつ市主催の健康ウォーキングやむつ市産業まつり等のイベントで、自己触診啓発ティッシュの配付や乳がんモデルを使用したセルフチェックの方法を指導するなどの啓発活動とともに、その場で乳がん検診の予約ができるようにした。むつ市の広報誌「MUTSU」の10月号の特集「いのちをつなぐ」では、乳がん経験者のインタビューや乳がん検診の大切さなどピンクリボンに込める願いの特集を掲載した。「乳がん検診の大切さ」の記事では、要因③である検査そのものの不安や恥ずかしさを解消するために、乳がん検診が検診車の中でどのように行われるか、放射線技師の解説とマンモグラフィ検査装置の写真、そして乳がん検診受診者のコメントを載せ、マンモグラフィ検査の可視化に努めた。10月上旬には、むつ市職員にピンク

色のアイテムの着用を依頼し、全庁的な協力を得ることができた。

連携グループは、むつ市すこやかサポート事業所、郵便局、銀行や保育所等へピンク色のアイテムの着用、ポスターの掲示、チラシ、リーフレットや自己触診啓発ティッシュの配付やピンクリボン関係のPRコーナー設置の協力を依頼した。教育委員会を通じて、小中学校の児童生徒の母親に乳がん検診案内のチラシの配付を行った。また、むつ市ホームページにムチュリー・ピンクリボンの特設ページを開設し、検診情報や活動報告等を掲載した。

統括グループは、それぞれのグループの情報の統括、プロジェクトオリジナルピンク色のポロシャツの作成、自己触診啓発ティッシュの獲得やイベントの調整を行った。

5. 「光でつなぐピンクリボン」イベント

このイベントを実施するにあたり予算を計上していないため、講演や事業所の協力はボランティアで引き受けていただいた。賛同の輪が広がり予算がない中で実施することができた。

むつ市役所内空きスペースを活用し、キャンドルを並べた「光でつなぐピンクリボン」やむつ市すこやかサポート事業所の協力によるむつ市役

所の一部のピンクライトアップ（図 4）、要因②の乳がんの知識不足を解消するために、むつ総合病院外科副部長山田恭吾先生による特別講演「今がその時！乳がん検診」が行われた（図 5）。また、有志による「尺八と三味線、唄の夕べ」、ピアノ演奏、血管年齢や肺年齢を測定する「健康チェッカーズ」や乳がん関連のブース、協力事業所のブース、郵便局とむつ市のキャラクターの共演など多

くの方々の協力を得ながらイベントを実施することができた。イベントへの市民の参加者は約 200 名であった。アンケート結果からは、「医師の専門的な講演が聞けて良かった」、「乳がん検診の大切さがわかった」、「乳がん検診を受診したい」、「すてきなイベントでした」など、概ね良好なご意見をいただいた。



図 4 むつ市役所ピンクライトアップと光でつなぐピンクリボン



図 5 特別講演「今がその時！乳がん検診」

	対象者 (40～69 歳)	受診者 (40～69 歳)	再掲 全受診者数 (70 歳以上含む)	受診率
平成 29 年度	12,825	1,467	1,863	20.9%
平成 28 年度	13,175	1,242	1,605	18.2%
増減	-350	225 ↑	258 ↑	2.7% ↑

表 2 平成 29 年度乳がん検診 受診状況

乳がん検診受診率＝（前年度の受診者数＋当該年度の受診者数－2 年連続受診者）÷対象者×100

結果

達成した。

平成 29 年度乳がん検診受診者数は表 2 で示すとおり、目標 1,442 名のところ 1,463 名で目標を

考察

厚生労働省発行の「今すぐできる受診率向上施策ハンドブック」によると、受診行動に影響を与える 3 大要因として、「意識の向上」、「障害の除去」、「きつかけの提供」ががん検診受診につながるとしている。それぞれ、疾病や検診の意義に対する理解を深めるサポートをすること、費用やアクセスなど受診環境を整えること、適切なメッセージによる個別勧奨を行うことが有意義であるとしている。今回のむつ市で行った乳がん検診受診者数増加のための事業を、この受診行動に影響を与える 3 大要因ごとに分類してみると、「意識の向上」は「光でつなぐピンクリボン」イベントでの医師による講演、自己触診啓発ティッシュやリーフレットの配付、プチ講座や市の広報誌での特集、「障害の除去」は検診増設、夜間の開催や託児の整備、そして「きつかけの提供」はイベントでの啓発活動とその場での乳がん検診予約、視覚的に訴えるカラーでの個別勧奨や再勧奨通知である。啓発活動実施時に、受診の障害になっているものは何かの視点で計画したことから、乳がんに関する啓発活動やイベントは、受診行動に何らかの影響を与え、受診者増加につながったと考える。

検診受診者数が伸びない要因の一つである、自分の都合に合わせて受診できる個別検診が実施できていないことに対しては、現在個別検診実施に向けて市内医療施設と調整中であり、平成 30 年度中に実施できる予定である。今後更なる受診者数増加につながることが期待される。

今回のムチュリー・ピンクリボンプロジェクトは事業所など多くの方の御協力により実施することができた。そして、プロジェクトメンバーが市民の健康を守るために、それぞれアイディアを出し合い、役割や持てる力を発揮し、事業に取り組んだことが成果につながったと考える。プロジェクトは解散したが、更なる検診受診者数増加と早期発見そして早期治療につながること、1 人でも多くの市民が健康で自分らしい生活ができるよう今後も啓発活動は継続していく予定である。

結論

乳がん検診受診者数を増加させるための啓発活動は、受診行動に影響を与える要因を分析し、その結果に則した対策のもと啓発活動を行うことが受診者数増加につながると考える。

【引用・参考資料】

- 1) [https://ganjoho.jp\(2018_04_20\)](https://ganjoho.jp(2018_04_20))
- 2) 平成 28 年度青森県市町村健康福祉関係主管課長会議資料 市町村別検診受診率(平成 26 年度地域保健・健康増進事業): 青森県
- 3) 今すぐできる受診率向上施策ハンドブック: 厚生労働省
- 4) 四方啓裕: 健康無関心層にも届けるがん検診受診勧奨の工夫、保健師ジャーナル Vol.71 No.09 P752-758, 2015
- 5) 溝田友里、山本精一郎: がん検診の効果的な個別受診勧奨、保健師ジャーナル Vol.73 No.12 P991-999, 2017